

家、そしてその拒絶
——人種化されたディアスポラの主体における肉体と場所の緊張関係——
Home and its refusals:
Tensions of flesh and place in the racialised and diasporic subject

ヘレン・ンゴ
Helen Ngo

翻訳：酒井麻依子・小手川正二郎・野々村伊純

要旨

本稿では、人種化とディアスポラにおいてしばしば重なり合う経験の中に現れる、疎外という現象を探究する。身体および家という場を考察しながら、本稿は人種化されたディアスポラ的状况に内在するいくつかの緊張を明らかにする。第一部では、身体的押収という概念を通じて人種化された疎外を検討し、人種差別のプロセスを通して身体が奪い去られることの意味を考察する。さらにこの議論を、身体がそもそも自分自身のものではないという観点から複雑化する。身体の社会性に関する議論と、アン・アンリン・チェンが装飾主義という名で展開した身体の構成的なモノ性の考察を通して、いずれの側面からも検討を加える。第二部では、ディアスポラの文脈における疎外を探究することに移る。そこでは、喪失と退去を経験した人々、あるいはそのトラウマの感情を受け継いだ人々に対して、家がしばしば切実な意味をもって現れる。家の拒絶に直面したときに現れる家の重要性を検討したうえで、ディアスポラ的な家づくりが入植植民地主義の文脈のなかで行われるときに生じる緊張に目を向ける。そして、移民である入植者が巻き込まれかねない共犯性と連帯性、およびそれらが要請する拒絶の様式を考察する。

導入

周縁から書いている人々にとって、「家」は長らく、引力を持ったモチーフであり、家とその喪失、切望、そして拒絶について熟考することは、移民、ディアスポラの人々、人種化された人々、植民地化された人々とそれらの共同体による著述に活気を与えてきた。このことは、退去と収奪の経験に影響を受けた個人史と集団的歴史を持つ人々に当てはまるが、社会生活の支配的な諸組織の辺縁に自分がいるように感じている人々にもまた当てはまる。マヤ・アンジェロウは自伝的な連作の五冊目において、公民権運動の時期におけるアフリカ大陸への長期の旅を回想しつつ、アメリカに戻ると決めた時のことを振り返って次のように書いている。

アフリカの心がいまだにつかみ難いものであるとしても¹、私がそれを探し求めたことで、私は私自身と他の人間についてよりよく理解するようになったのだ。家への切望は私たちみんなの中にある。私たちが私たちのままでいられて、問いただされることのない安全な場所。(Angelou 1991: 196, 強調ンゴ)

アンジェロウが家への「すさまじい思慕」を普遍的に共有されたものとして——彼女の著作には、『神の子は誰でも旅行用の靴を必要としている All God's Children Need Travelling Shoes』という題がついている——描いている一方で、やはり、自分たちが問いただされるべきものへと歪められ——あるいはデュボイスを引くならば問題へと歪められ——ていることに絶えず気づかされる人々は、家との関係で、あるいは家を探し求める中でとりわけ切迫したものを抱いている。本稿は身体と家という場所、そして家としての身体について論じることで、人種化され退去させられている主体が疎外されているという文脈において、家を思慕するというのはどのようなことか、そして家を拒絶されるということがどういうことなのかということを検討する。本稿は、私たちの身体という親密な空間において、そして私たちを支えている場所において、親しみ、養育、所属の感覚を拒絶されたときに私たちが耐え忍ぶことになる喪失を扱う。だが同時に、家を拒絶するということがどういうことなのかについて検討する。ここで家を拒絶するという言葉が意味するのは、退去させられ人種化された人々に許された家についての限定的で条件付きなモデルを拒絶することである。本稿は、家と馴染みがあることホームリネスの感覚がときおり痛ましい仕方で、しかし同時にときおり必然的な仕方で、私たちから逃れるのはどのようにしてかを突き止めるべく、二つの道筋を辿る。本稿の第一部では、身体的な押収〔confiscation〕と没収〔expropriation〕という概念を通して人種的な疎外について検討し、人種差別のプロセスを通じて、ある人の身体から奪い去られてきたものが何かということ考察する。同時に、この議論は、身体ホームリネスの社会性という議論を通じてであれ、アン・アンリン・チェンが展開したように、身体ホームリネスの構成的なモノ性〔thingliness〕を通じてであれ、そもそも私たちの身体が決して本当に自分自身のものではない場合についての検討を行うことによって複雑化するだろう。第二部では、ディアスポラの文脈における疎外について検討する。この文脈においては、喪失と退去を経験した人々にとって、あるいはそのトラウマの感情を受け継いでいる人々にとって、家がしばしば感情を喚起せずにはいられないものとなっている。家への拒絶に直面した場合の家の重要性を検討したうえで、ディアスポラ的な家づくりの作業が入植植民地の文脈において行われている場合に生じるいくつかの緊張に目を向け、移民である入植者が共犯性と連帯性を持ちうるということ、そしてこれらが要請しうる拒絶の様式がどのようなものであるかを考察する。本稿は、自己感覚との関係において、そして世界に所属しており、世界の中に据えつけられているという感覚との関係において、人種化されディアスポラ的に疎外される経験について考えるために、身体という場所と家という場所を行き来する。私の目的は、そうすることによって人種化されたディアスポラの主体にとって馴染みがあることホームリネスと家ホームのないことホームレスネスが思い抱かれるいくつかの仕方を明らかにすることであり、また家ホーム・庭プレイスへの欲望と必要性をそれらがもたらす

¹ 引用した版には「暗示的 allusive」と書かれているが、これは誤植のようであり、他の版では「つかみ難い elusive」と書かれている。

限界と矛盾との緊張関係において考慮することである。

1. 人種化による疎外と肉体とモノ性の緊張関係

人種差別と人種化の経験において長らく特徴となってきたのは、ある人の身体とアイデンティティが外から掴まえられ、形作られるという感覚である。この特徴については、長く豊かな伝統において、さまざまな著者、研究者、活動家、芸術家らがさまざまな仕方で記録し、詳細に述べてきた。このような議論は、人種差別の物質的、法的、経済的、社会的な害についての諸分析と対立しないし、むしろ人種差別の持つ実存的な深みについてのより充実していて補完的なイメージを提供している。私は以前の研究において、可視的に人種化される身体が——フランツ・ファノンの洞察にしたがえば——頻繁に自分自身の前に置かれることについて検討した。それはつまり、人種化される身体が使い古された固定観念や期待、言い回しなどを通じて過剰な規定〔over-determination〕と事前の規定〔pre-determination〕に対応する形で空間的にも時間的にも、自分の前に置かれるということである(Ngo 2017: 62-68/132-144)。習慣を、身体的経験とその身体が住まっている場所の両方に本質的な形で絡むものとして理解しつつ習慣について現象学的に論じることで、私は、人種化が退去と「居心地の悪さ」(Ngo 2017: 93/184)という重大な感覚を伴っていることを明らかにした。この感覚を本稿では疎外と呼ぶ。哲学者ジョージ・ヤンシーは、ファノンの疎外についての議論を詳述する中で、日常的な社会空間における黒人の身体性についての経験を記述するために、「押収」という語を用いている(Yancy 2008: 1)。ヤンシーは「ファノンは、自分の身体を、存在論的に孤立したものとして、あるいは「新種」として送り返すことで押収する白人の眼差しの力を理解している」(Yancy 2019: 71)と述べている。ファノンが、電車や喫茶店、映画館といった日常的空間において、送り返された自分の身体に出くわすとき、その身体は本当のところ「自分の」身体ではなく、異化され認識不可能となった身体だったのであり、彼の言葉で言うところの「歪められ、色を塗り直された」身体だったのである(Fanon 1967: 113)。この文脈における押収とは、ヤンシーによると、次のような過程を指している。すなわち黒人の身体が

彼らの意味と彼らの^{インテグリティ}完全さ……を盗まれ、あるいは持ち去られ、そして彼らが
そうであるとみなされ、彼らが持っている^{モノ性}とみなされるものとして彼らに投げ返
される〔過程〕。語源的に、押収という語は、権威によって奪われることを意味す
る。(Yancy 2019: 70)

セリーヌ・ルブーフは的確にも、人種の批判的現象学者たちが人種化の経験について記述する際に頻繁に引き合いに出してきた身体的疎外についての簡潔な考察の中で、この文脈における「疎外」の概念の二重の本性として、記述的な構成要素と規範的な構成要素の両方が存在することを指摘している(Leboeuf 2022: 126)。言い方を変えると、いくつかの言明は何らの暗黙の規範的判断を含まない——ルブーフが挙げる「君は日焼けしているように見えるよ」という言明がある人の優先事項か美的な選好に依存して良いことにも、悪いことにも受け取られうる(LeBoeuf 2022: 126)——のに対して、ある人の身体的な疎外についての

言明はすでに、そして必然的に否定的なものである。ルーフは「自分の身体から疎外されているということは物事の欠如的な状態である」(LeBoeuf 2022: 126) と述べている。ここでルーフは、クリスティン・ツァイラーによる疎外についての考え方、つまり人種化された主体たちの経験する連続的で持続的な脱身体化〔excorporation〕が引き起こすものとしての疎外という考え方を借用しており、そのような疎外は累積効果として「主体の生きられた身体^のより徹底的で深刻な破損」(Zeiler 2013: 80, LeBoeuf 2022: 70 での引用) をもたらすものである。ラヘル・イエグィが出す「君は体調が悪そうに見える」という、やはり本来的に否定的な価値づけを帯びた言明の例との類似に着目しつつ、ルーフは人種化の文脈における疎外が診断的なものとして機能していることを主張する。それは記述していると同時に評価しているのである。しかし、ルーフの主要な関心が、通常は記述という方法をとる現象学の枠組みの中に、規範的な主張が位置づけられうるかという疑問(この疑問に彼女は最終的には肯定で答える)へと移行するのに対して、私はその前の段階、つまり、なぜ疎外が即座かつ必然的に「物事の欠如的な状態」として理解されるのか、という疑問にもう少し長くとどまりたい。この疑問が、私たちの身体性、肉体、自己アイデンティティ、そして行為者性の関係および本性について前提していることは何だろうか。疎外が傷つけるものであるというのはどういうことなのか、そして何が傷つけられるのだろうか。私がこれらの疑問を提起するのは、人種化と人種差別において傷害があることに疑義を呈するためではない。このことは議論の余地のないものだと考えている。しかしながら、私がここで行いたいのは、これらの省察の背景に漂っている馴染みがあることと完全であることという観念との緊張状態において、この害が疎外として理解される場合の、その本性についてももう少し考えることである。

ヤンシーから引いた先程の一節に戻ると、所有の隠喩が押収という概念を生気づけているということは特筆すべきことである。黒人の身体(そしてヤンシーは彼の分析を、黒人とは別様に人種化された身体へも拡張している)は盗まれ、持ち去られ、奪取された身体なのである。押収という概念はそれ自体、事前の所有権、あるいは少なくとも事前の所有を想定している。しかしこれは、多くの人々によって異議が唱えられてきた主体の存在論を示している。ヤンシー自身もこのことを自覚しており、ジュディス・バトラーの、「身体はいつも公共的な次元を持っている。公共領域において社会現象として構成されることで、私の身体は私のものであり、私のものではない」(Butler 2006: 26/58-59; Yancy 2019: 71) という議論に目を向けている。それゆえヤンシーは「私たちの身体性はある種の収奪〔dispossession〕の場である」(2019: 71) ということを確認する。私たちの身体は、完全に自己所有されるものではないし、完全に自己著述的なもの〔自律的に自分を規定すること〕ではなく、そしてそういうものではあり得ないのである。実際、バトラーによれば、私たちが自身について語ることに言え、「この収奪においてのみ、私は自分自身を何らかのかたちで説明することができるし、また実際に説明するのである」(Butler 2005: 37/54)。まさにそうしたものが、呼びかけ〔address〕の本性なのである。バトラーとは別に、現象学者たちもまた、自己が境界づけられていることについての観念と自分のものであることという観念を、より深い、前反省的なレベルにおいて揺るがず研究を行っており、知覚的、時間的、空間的な経験、そして身体化された経験が、間主観性を持ち、共有されているということを指摘している(Young 2005, Guenther 2013, Al-Saji 2013, Murphy 2024)。もしもある種の放棄、または境界を画されていないことが私たちの存在を構成する特徴であるのならば、ある人の身体が人種化の文

脈において押収されるということは、何を意味しているのだろうか。もちろん、身体が収奪の場所であると存在論的な条件として述べることは、現実には起きている、つまり歴史的に、選択的に、故意に遂行されている収奪の特異な感覚について述べていることにはならない。別の言い方をすれば、存在論的な収奪についての一般的な議論は、具体的に人種化される収奪の重要性を消し去りはしない。ヤンシーは次のように述べている。

白人の眼差しに対して黒人の身体の意味が押収の場を作り出すような、とりわけ歴史的で暴力的な仕方というのを前もって設定しておく必然性はない。それは別の種類の人種化された収奪なのである。(Yancy 2019: 71)

サラ・アーメッドは、彼女の初期の著作『奇妙な出会い』(2000年)において、異化の状態と人種化された異化の特殊性との関係において、類似した議論を展開している²。

文学・文化理論家のアン・アンリン・チェンは、アジア人³女性像の装飾性〔ornamentality〕を考えることで、先の省察についての興味深い対比を行なっている。チェンが自分を「黄色人女性」と呼ぶのは「黄色人性」を復興しようとしてのことではなく、彼女の主体としての位置がもつ「気持ち悪さ」とディレンマを名付けるためである(Cheng 2019: x)。黄色人女性について、彼女は「傷つけられえないほどに美化されているのではなく、傷害を引き寄せ

² ヴィンス・マロッタはアーメッドの議論を次のように要約している。

普遍的なよそ者状態^{ストレンジャーフッド}という主張は、よそ者というカテゴリーを概念的に過剰にしており、特にそれが他者化のプロセスから切り離されている場合にそうである。そしてポスト人種的な社会についての言説を連想させることで、その主張は私たちが今やポストよそ者世界に住んでいるということを理解するよう導いていくことになる。アーメッドにとって、そのような見方は理論的に疑わしい上に、政治的に危険である。それは「私たち」が共通に持っているものを存在論の見地から考えるだけでなく、普遍化^{ホームレスネス}もしてしまう。たとえば家のないことの普遍性はこの場合には「自らの確定の歴史から切り離される〔よそ者の形象〕」となる。

Marotta, Vince. "Meeting Again: Reflections on Strange Encounters 20 Years On." In *Journal of Intercultural Studies* 42, no. 1 (2021): 1-7, 6. [マロッタ, ヴィンス「再会:『奇妙な出会い』を20年後に反省する」]

³ チェンのそこでの研究において、しばしば「アジアの女性性」と「黄色人女性」という言葉の間の横滑りが見られる。そして両者は明らかに同一の広がりを持つカテゴリーではない。実際、北アメリカとオーストラリアのような場所において「アジア人」というカテゴリーからの南アジア人が慣習的に排除されていることはしばしば批判されている(“Why Don't South Asians in the U.S. Count As ‘Asian’?: Global and Local Factors Shaping Anti-South Asian Racism in the United States”. *Sociological Inquiry*, 94 (2024): 351-368 [なぜアメリカの南アジア人はアジア人に数え入れられないか? アメリカ合衆国における南アジア人への人種差別のグローバルでローカルな要因])。チェンが自身の著作において「アジアの」女性性に頻繁に言及する際、彼女は主に東アジアの女性性に携わっているようである。さらにその上、彼女の分析の大部分はとりわけ中国人女性を中心としたものである。

てしまうほどに美化されている人間として生き抜くとはどういうことか」と問うている (Cheng 2019: xi)。ホーテンス・スピラーズが最も印象的に語ったように、黒人女性がむき出しの肉体へと還元されることとは対照的に、チェンは、黄色人女性について次のように主張する。

彼女は自分のむき出しの肉体に由来するのではなく、座る彼女の傍らにある絹やダマスク、マホガニー、陶磁器との装飾的（そして投影された存在論的）同質性に由来する。(Cheng 2018: 416)

言い方を変えると、黄色人女性は徹底的で永続的に、対象を通じて、そして対象の傍において、それも特に美的対象——つまり装飾品——を通じてその傍らで、構成されるのである。チェンはこの主張を行う際、1830年代に「中国人女性」と題された生きた展示物の巡業のためにアメリカに連れて来られたアフォン・モイから、メトロポリタン美術館で2015年に行われた「中国：姿見を通して」という展覧会に至るまでの、黄色の女性性を美的に見せ物にするという長い歴史を基にしている。もっとありふれたものでは、映画や演劇に繰り返し登場する「中国人形」というイメージと多くの類似表現からグローバルな美容産業でアジア女性の「磁器のような肌」に対する賞賛的な描写に至るまでの、私たちの文化的想像力の中で流通しているいくつもの例を簡単に思い起こすこともできる。後者に関してチェンは次のように述べる。

中国人女性の与える充実した感覚的な情緒を獲得するために、本物の中国人女性はいらない。「彼女」は、軽快な扇子さばきによって、絹のサラサラという音によって、龍のうねりによって、冷たく小孔のない陶磁器の曲面によって呼び起こすことができる。今日では陳腐となっている、アジア人女性と磁器との結びつけ…これは、「東洋的な肉体」と装飾的な物質を想像の中で混ぜ合わせるという根本的で重層的な歴史をもたらした。磁器としての中国人女性の肉体、中国人女性の肉体としての磁器。(Cheng 2024: 126)⁴

⁴ 黄色人女性と磁器を絡めることについて、チェンは次のように詳述している。

中国の磁器はその光沢のある美しさ、危なっかしい優雅さ、色への受容性とデザインの巧みさによってだけでなく、その驚くべき耐久性、磁器の半透明さをもたらす超高熱にも耐えるその奇跡的な許容力によっても知られている。磁器が持つこれらの感覚的で情緒的な価値はこうして中国人女性の人種化された身体に転写され投影される。半透明の磁器は硬さと柔軟性の両方を暗示するようになった。旧世界の美と新世界の技術、壊れやすい優美さと感覚を持たない冷たさ。(Cheng 2024: 126)

この議論は、陶磁器であれ絹であれ、あるいは機械であれ、物質性の特殊な諸形式とともに黄色人女性が同時発生するという議論を越え出ている。歴史的な絡み合いを辿ることで、チェンが行き着いたのは、黄色人女性における肉体と非有機的物質との融合に関するより深い主張である。彼女は次のように述べる。

それゆえ「黄色人女性」という夢想は、長らく人工的な生命についての夢であり続けてきた。彼女は現代機械の脅威よりもよほど前から化学的合成物と非人間的なものに巻き込まれてきた。こうして、彼女は、唯一ののではないとしても、一つの原初のサイボーグなのである。(Cheng 2024: 126)

しかし、現象学と他の批判的な試みが、彼女の身体性〔corporeality〕と否定された活力を回復すべく、復旧的な仕草によって黄色人女性を有機的な身体へと戻そうとするであろうと思われるのに対して、チェンは、モノ性と人格性の間にある間隙にとどまって思考するように主張するのである。

……黄色の女性であることの周辺的人間性〔perihumanity〕は、生物と無生物との間の区別そのものを問いたず総合的な堆積から生まれた存在論の状態を理論化することを可能にしてくれる。(Cheng 2019: 3)

ここでチェンが私たちに再考させようとしているのは、人と物、生きているものと生きていないもの間に私たちが設けた境界とヒエラルキーである。それというのもまさにこれらの境界こそ、黄色人女性たちが、自分たちの装飾性の歴史を通じて、その「間隙的な」あり方の歴史を通じて、持続的に存在し続けてきたことによって圧迫されるものなのだから。チェンにとって、黄色人女性は物(絵画、花瓶、ドレス、サイボーグ)を通して構成されてきており、彼女の人格性は一定程度、諸対象によって保障され、それらの対象に負っているがゆえに、諸対象の方にもまた人間的価値と痕跡が染み込んでいる——これこそ、人と物の相互的な重なり合いなのである。そして、この相互の重なり〔co-imbrication〕が双方から生じることを指摘しておくことは重要である。なぜなら、人種差別が人々を対象に変えてきた仕方(「最も悪名高い事例はもちろん動産としての奴隷制度であり、そこにおいては人が物にされ、道具または所有物となって、家具の一点のようなものになっていた」 Cheng 2024: 124)、その仕方についてはよく認識しているとしても、私たちがしばしば見落としてしまうのは——しかし黄色人女性の状況が強調してみせるのは——それが逆向きにも展開することだからだ。つまり「人種差別の歴史は単に人々を物に変えてきただけでなく、むしろ物を人に変えてきたのだ」(Cheng 2024: 124, 強調ンゴ)。そしてこの、物を人に変えるということ、装飾的な物を「東洋的な」人に変えることこそが、チェンが次のように考えることを可能にしている。すなわち、黄色人女性が、通常、人種的な対象化と商品化についての言説がいつも主張するように単に対象のレベルに貶められ、あるいは還元されている

だけでなく、むしろそれらに負っているところもある⁵——たとえこの負っているものが望まれてはいないものであるとしても。

『オーナメンタリズム装飾主義』でのチェンの理論はエドワード・サイードの『オリエンタリズム』の反響——反響よりも歪曲されたものかもしれないが——をその中に聞き取ることができるものであり、諸対象や諸物との歴史的な絡み合い、そして対象や物としての歴史的な絡み合い、黄色人女性が持つ歴史的な絡み合いについての、議論から始まり、彼女がどのような存在を生きているのかについて探ろうと企てている。チェンが主張するように「押しつぶされるような対象性として、あるいは対象性を通じて生き延びることが何を意味するかという困難な問いを問わねばならない」(Cheng 2021: 13:08, 強調ンゴ)。そしてこの問いを提起することは、私たちの通常の存在論的枠組みを再考することを要請する。私たちは、「人間の肉体が否定できない形で、人間の奴隷制の歴史にとって支払われた最も高い代償であり続けてきた」という厳然たる事実と直面したとき、「失われ傷つけられた肉体への切望、あるいは逆に、身体の完全な拒否」(Cheng 2018: 436)のいずれかを表明する立場を標準とすることにも抵抗するように求められているのである。別言すれば、私たちは黄色人女性の対象化、商品化、フェティッシュ化という不愉快な歴史を、それを非難することにも、修正することにも飛びつくことなく、向き合う必要がある。なぜなら、こうすれば、黄色人女性の人格性の様態、彼女の生存の様態についてのより充実した議論に行き着けるかもしれないからである。そしてチェンによれば、そうすることによって、私たちは身体と肉体という私たちの持っている基礎的なカテゴリーを再考する必要がある状態になる。

肉体性が肉体によって養われるのではなく、無機物との融合によって養われるのであれば、主体についての私たちの考え方に何が起きるだろうか。(人種的な指示物によって媒介されつつも、それから分離されている)スタイルが単に存在論の過剰あるいは反対物なのではなく、むしろ身体性の前提条件であり、人間というカテゴリーの基盤そのものに異議を突きつける洞察である可能性があるとして、私たちが受けとめるときに何が起きるだろうか。ここで重要なのは、人々の単なる対象化ではなく、むしろそのような対象化がどのようにして、固有な人格性と生の分節化の内部で、構成的な異化を開始するのかということである。(Cheng 2018: 436, 強調ンゴ)

チェンの議論の中に私が聞き取るのは、私たちの身体と肉体というカテゴリーと、それらが——記述的にであれ、規範的にであれ——保持すると私たちがみなしている馴染みのあることという性質 (Ngo 2017: 102-105/200-206) を考え直すようにという、人種の現象学において研究をしている私たちのような人々に対する挑戦であるが、また他の批判的伝統における研究者たちに対しての挑戦である。黄色人女性の装飾的存在が持つ特殊性について熟考していくと——チェン自身は彼女の理論のより広い適用可能性の議論へと

⁵ チェンは黄色人女性が私たちに対して、「人間が商品、人工物、そして対象性に負っているところがあるという存在論の政治に適合することのできるであろう、人のモノ性についての理論を再考する」(Cheng 2018: 415-416) ように迫るのだと主張している。

進んでいくのだが (Cheng 2018: 443-446) ——扱われているのがそもそもその「肌」が決して有機的な状態であるという空想を享受したことのない」人々の身体であるがゆえに、私たちは、構成的な異化によって徴づけられた、身体と肉体の議論へと到達する。チェンの議論の中にはまた、自分の傷から、そして傷を負っているという状況から出発し、それについて熟考するという、より近年の現象学的試みとの共鳴が見られる。その二例が、アリア・アル＝サジの「植民地の持続の傷に触れる」(2024)とマリアナ・オルテガの「有色の身体、悲しみの身体」(2019)である。オーストラリアのアボリジニ芸術家であるヴァーノン・アー・キーは2023年のテキスト作品において、私は私の傷ではないと主張している。この作品についての解説で、彼はこの主張をさらに「私たちがどれほど傷つけられ、害を加えられていたとしても、私たちは私たちの傷ではないのだ」と述べている。だが、もしも私たちが私たちの傷であるならばどうなるだろうか？ そして傷が私たちでもあるならばどうなるだろうか？ オルテガは、ホセ・エステバン・ムーニョスにしたがって、「死者を自分たちと共に連れている」(Ortega 2019: 136)世界に生きるというのはどのようなことでありうるかについてじっくりと考えている。現象学は、生きられた身体とその生活世界への没入を強調する伝統と共に、生きている者の側に立ちすぎており、その結果、私たちが死者によっても構成されているというそのあり方をしばしば見逃してきた。死者や死滅したものから出発することを主張するというのはどういうことなのだろうか。私が思うに、チェンの貢献は、私たちがいくぶんかは、死者ではないにせよ、少なくとも無生物でもあるということに自覚させることになったということである。肉体と有機体である状態の喪失は、単にそこから救い出されたり、治療されたり、否認されたりするべきものに過ぎないのではなく、私たちの人格性の条件として真剣に受け止められるべきものでもあるのだ。

以上のことは私たちをどこに導くのか。ヤンシーによる身体の押収についての議論とルーフによる疎外の分析(そして彼女の作り上げた伝統)に立ち戻ると、チェンの装飾主義についての議論が人種差別的な傷害という主張に異議を唱えるものであるというわけではなさそうである。実際、黄色人女性を含む人種化された身体は、歪曲、捕獲、そして疎外にあう。だが、私が思うに、チェンが警戒しているのは、身体における所有していること、自分のものであることという、真正性の主張に強く結びついた概念に加えて、正当に家庭的で、あるいは全体的であるという、身体についての根本的な概念である。黄色人女性のモノ化について、「しかしこの人=装飾=モノは本当にアジア人女性なのか」と応答することは、容易であり魅惑的でもある。この押収され、歪められ、疎外され(「欠如的な」?)彼女のあり方は、まるで本当の彼女ではないのではないかと。あるいは、この黄色人女性は固定観念であり、くたびれた台本であり、アジア人女性が彼女自身を見ているのとは全く似ていないのではないかと。だが、これはある意味で誤った類の問いの立て方である。チェンにとって、私たちの頼みの綱は、自分の本物さ、あるいは自分のものであることについて重ねて主張することではないはずである。パーレスクの黒人スターであるジョセフィン・ベーカーについての著作(このプロジェクトから『装飾主義』が発展することになる)に関する2015年のインタビューでチェンは次のように述べている。

6 あるいはおそらく私たちはさほど私たちの傷ではないというわけではないが、私たちは私たちの傷だけであるわけではないのだ。

私は、自己の意思または意図の行為としての、救いとなり事態を反覆させるような行為者性を据えることに関心はない。なぜならば、私を悩ませる研究対象の女性たちは、意思と意図を容赦なく妥協させられている人たちだからである。……私はまた、本当のものか真正のものを誤った表象に対する解毒剤として供することが答えになると考えているのでもない。(それゆえに私はベーカー、あるいは[アンナ・メイ・]ワンについての伝記を書かなかったのだ。)

黄色人女性の「周辺的人間性」に立ち戻ろう。チェンが警告しようとしているのは、黄色人女性に対して拒まれているものは何かということ——例えば身体的な統合性と取り入れ〔incorporation〕、そして馴染みのあることまたは行為者性など——に関する規範的な主張にあまりに拙速に飛びつくことで、私たちはいつも何が事実であるのかということを見逃してしまいかねないし、そのことによって彼女や他の人種化された身体が何とか対処しなければならず、そしてその道を切り開いてきた異なる存在論的な生存の仕方を見逃してしまいかねないということなのである。チェンの主張に沿って整理すると、黄色人女性の反逆性ではなく、彼女の生存はどのようなものに見えるのか？ ルブーフの人種化された疎外に改めて立ち戻ると、おそらく私たちは、記述的なものが他にも私たちに明らかにするものが何であるのかをよりよく見てとるために、規範的なものと記述的なものをもう少しだけ区別しておく必要があるだろう。

2. ディアスポラのホームレス性と入植植民地主義の文脈における家づくり

ここで話題を変えて、ただし願わくば思索を深めるために、人種化される主体からディアスポラ的な主体へと、また身体〔body〕という領域から家〔home〕という領域に移りたい。おそらくはやや意外に聞こえるだろうが、私はこの二つの移行が一見そう思われるほど大きな移行ではないと主張したい。というのも、私の著述の背景をなすような入植植民地主義の文脈においては、人種化される主体は大抵の場合——ただしつねにそうであるわけではないというのも重要だが——ディアスポラの主体でもあるからだ。ディアスポラの主体が退去に至る事情は、大抵の場合、経済的、政治的、法的、軍事的な手段を通じて人種差別が顕在化することによって生じるが、これまたつねにそうであるわけではない。この二重性においてさらに、私たちのなかでも、人種化されると共に（私たちの「離散」がどれほど最近起こったものであれ、どれほど暴力的に起こったものであれ）ディアスポラの一部として自己を理解している人々には、自分たちが疎外される主要因と論理の両義性を取り除く試みはどれも、的外れなものに見えるかもしれない。どんな目的のために二つを分離して分析するというのか⁷。身体から家への移行に関しては、人種化による疎外という現象がそれとの対

⁷ そうはいつでも、ホセ・ホルヘ・メンドーサ（2023）は、外国人嫌悪（xenophobia）もまた白人至上主義（white supremacy）に利用されるという認識をもちつつ、外国人嫌悪とは——重要な仕方で絡み合っているとはいえ——区別されるものとして人種差別を概念規定する説得的な議論を提示している。メンドー

比のもとで理解されうるような、ある種の家としての身体に基づいて議論を進めてきたが、その一方で私たちを支え⁸、私たちがしがみついた生きられた空間や場所としての家について考えることも同様に重要である。この意味での家は、たんに比喩的であるだけではなく、物質的で空間的なものでもあり、様々な身体と家との関係は、たんに同型のものが共鳴し合う関係だけでなく、身体が家のなかに巣ごもる関係でもあるのだ (Ngo 2017: 102-5/200-206)。

ディアスポラ的な状況を考察する思想家や作家や芸術家たちのなかでも、家とその喪失が目立って強烈に現れるのは、驚くことではない。しかもこのことは、退去を選択したり意図したり望んだりすることがなかった人々——退去がひどくトラウマ的なものであったし、そうであり続けている人々——にとって切実なものである。幼少期に両親とボートで戦争から逃れたベトナム系オーストラリア人の詩人で小説家のナム・リーは、最近の著作『36通りのベトナム詩の書き方』のなかで家と自己のこの喪失の不可分性と深刻さについて書いている。「ディアスポラの」という巻頭の詩は、知られていると共に知られていない、現にありと共に潜在的である（とはいえ現実的でないわけではない）破壊的な喪失を跡づけている。

[1. Diasporic] 1 ディアスポラの

In English, mind You 英語でいうからよく聞けよ
You dink I writee Yiknamee? イックネームと書くとおもたか?
Shame on You. 恥を知れ
It was Your violence dumbbed me 私を黙らせたのはお前の暴力だ

Smearred me, reaved me – 私を汚して奪った
Your war I don't remember – お前の戦争を覚えちゃいないけど
—And won't let You forget— —お前が忘れることは許さない—
Moved me 私を立ち去らせた

サは、「もといたところに帰れ」という古典的な人種差別的罵り文句（オーストラリアの文脈では、「もといたところに失せやがれ」という形で上品に表現されている。<https://www.hrlc.org.au/human-rights-case-summaries/2024/11/25/faruqi-v-hanson> を参照）を手がかりとし、それを分析することで、人種化・人種編成 (racial formation) ・(彼の提唱する用語である) 反人種統合 (racial disintegration) の〔外国人嫌悪とは〕異なるプロセスについてのより優れた洞察に至っている。これに対して私が先に述べた論点は、人種化されたディアスポラ的な主体にとって彼らの疎外の主要因や動機が何であるかは、疎外を経験しているときにはさして重要ではないということだ。Mendoza, José J. ““GO BACK TO WHERE YOU CAME FROM!” Racism, Xenophobia, and White Nationalism” in *America Philosophical Quarterly*, 60 no. 4 (2023): 397-410.

⁸ もちろん、多くのフェミニストの思想家たちが注意してきたように、家が私たちを抑えつける場所でもありうるということに注意することは重要である。この点に関する議論については、Young, Iris M. “House and Home: Feminist Variations on a Theme” In Young, Iris M. *On Female Body Experience: ‘Throwing Like a Girl’ and Other Essays*. Oxford University Press, 2005:27-45.

From place and sufficiency. 場所と充足から
From everything I didn't know 私が知らなかったすべてから
I didn't know 私が知らなかった
I would've known 私が知るはずだった [すべてから]

You would've known. お前は知るはずだった
Dis placement ディス・プレイス・メント
Everything to me 私にとってのすべて
Before the power went 力がなくなる前には

Home. Shame on me. 家へと。自分が恥ずかしい
What do I know? 自分は何を知っている？
What's Vietnamese in me 私のなかのベトナム的なものは
Could fit in a poem. 一つの詩に収まってしまった (Le 2024: 2)⁹

リーは、「dis placement」とわざとスペースを空けることで、場所が意味すること、「この場所が意味していた [this place meant]」ことを聞き取ることを私たちに求めている¹⁰。しかも、この場所が意味していたことは、「私にとってのすべて」であったがゆえに、それを奪われ、そこから暴力的に引きはがされることでリー——彼が何者であるか、彼が何を知っているか、彼が何者でありえたはずで何を知りえたはずか——を5連20行の詩にまで切り縮め圧縮してしまう。

このような喪失をひとたび被ると、決して完全には克服されない。こちらもまたアメリカによる戦争の被害者であるベトナム系アメリカ人作家・学者のヴィエト・タン・グエンは、自身の退去の恒久性について回想録のなかで次のように述べている。

たとえ君が他の人から移民 [immigrant] と呼ばれても、自分のことを移民と呼んではいけない。

自分のことを…難民 [refugee] と呼びなさい。
それが今ないし今に至るまでの君の実態なのだ。移民はいつ去るか、どこに行くかを選べる。難民は行けるところならどこにでも逃げる。問題となるのは、難民たちはいつ逃げるのをやめられるのかということだ。「(元) 難民」と呼ばれることもあるかもしれないが、その [元という] 形容詞は、つねに括弧つきのものであり続ける。

⁹ 2025年4月11日、オーストラリアのサイモン&シュスター社より本詩の掲載許可を得た。

¹⁰ これは、リーが詩冒頭の一連目で巧みに仕掛けていることだ。そこでは、“You dink I writee Yiknamee? (「イックネームと書くとおもたか?」) が、ベトナム人が発音する「d」の「th」への音のずれを予想させ、その発音を忠実に音写すると共に、この別の言語への置換 (translinguation) (別の言語での音写、ただし発音の音写) が受ける嘲笑を記録している。

[...]]

自分のことを難民と呼びなさい、あまりにも多くの難民が自分を移民と呼んでいるのだから。(Nguyen 2023: 153)

彼が編纂した論集『退去させられた者』の序文で指摘しているように、「難民は定住できる新たな家を見つけた時に難民ではなくなる」(2018: 17) という国連の定義にもかかわらず、グエンは難民状態にあった過去と現在の区別が本当に維持可能かどうか腹の底から決めかね続けている。彼にとって、退去——とりわけ難民の退去——の状態とは、場所・時間¹¹・言語¹²・家との関係を絶えず再編し続けるものだ。家について、彼は次のように述べている。

君は永久にあの場所とこの場所、「この場所 [dis place]」かつ「退去先 [displaced]」つまりつねに家であり続けるが心休まぬ場との狭間にいる。どこに行っても完全に居心地がいいことは二度とない。なぜなら家とはたんに幸せに満ちてどんなことも解決済のところであるような場所だけでなく、居心地が悪く心身の休まらない [dis ease] 場所であることも多いのだから。家によろこそ。「家を愛せよ、さもないければそこを去れ」。(Nguyen 2023: 260)

場所とりわけ家の喪失が¹³、難民の退去状態——そして管見ではより一般的にディアスポラの他の諸様態——を定義する限りで、家の喪失から家づくりへの行程には、緊張と交渉がつきものである。マリアナ・オルテガは、家をめぐる戦術 [hometactics] をめぐる論考のなかで、自己・アイデンティティ・欲望の複層的な性格ゆえに、家や家づくりの企画が「たや

¹¹ 彼の小説『シンパ』(The Sympathizer) で、グエンはカリフォルニアでマダムが新たにオープンしたフォーレストランの壁にかけられた、ベトナムの形にかたどられた木製の時計を描いている。

一つの国であるこの時計と一つの時計であるこの国にとって、長針と短針は南を軸に回り、文字盤の数字がサイゴンの後光のようにになっている。これこそまさに難民となった同胞たちが求めている時計だと考えた亡命中の職人がいたのだ。私たちは退去させられた者であるが、私たちが定義づけたのは空間であるよりもむしろ時間だったのだ。失われた祖国に戻るまでの距離が遠いけれども限りがあるのに対して、その距離を埋めるためにかかる年数は、潜在的には無限である。このように、退去させられた人々にとって、第一の問いはつねに、「いつになったら帰れるのか」といった時間に関連するものなのだ (Nguyen 2015: 191-192, 強調ンゴ)。

¹² 言語について、グエンは次のように述べている。「どんな言語と出会っても、つねにその内側と外側のどこかに位置している。ベトナム語で孤児となり、フランス語はぎこちなく、英語では養子となった」(Nguyen 2023: 260)。

¹³ 家を模範的な場所とするンゴによる概念化について指摘しておく。

私たちは誰もが何かを始めるための「ここ」を必要としている点で、家はありきたりな場所の一つにすぎないだけでなく、むしろそれ以上のもの、つまり所属と方向づけの模範的な性質を備えた特別な場所なのだ。こうした性質は、理論家たちがより一般的な形で場所に帰してきたものだが、家とはある意味で模範的な場所 [paradigmatic place] なのである。(Ngo 2017: 120-121/235)

すく排他的な空間となりかねない」(Ortega 2014: 180) のはどうかを思い起こさせる。オルテガは、「ニューメキシコ [Nuevomexicano] 文化という文脈においてラテンアメリカ系女性かつレズビアンである者としての[...] 生きられた経験」がときにもつ「矛盾した性格」に関するマリア・ルゴネスの考察に依拠する (Ortega 2014: 178)。オルテガは、ルゴネスについて、次のように述べている。ルゴネスは「ラティーナ [ラテンアメリカ系女性] の世界とレズビアンの「世界」双方に住みこんでいる。いずれの世界でも彼女は欠損状態にあるが、しかし境界に住まう者として、どちらかの世界に完全に捕われることもない」(ibid.)。まさにこの狭間性、どこかに一つの家があるという見込みへの相反する気持ちゆえに、オルテガは次のような疑問を抱くに至る。

私たちは家の神話を越えて、家づくりと所属をめぐる脱中心化した実践の方へと、完全な所属の可能性を放棄し、ただ一つの側や場に所属したいというあこがれをもたない可能性を許容する実践の方へ向かうことはできるのか。(Ortega 2014: 181)

ロリ・ガレゴスは、アメリカ合衆国におけるラテンアメリカ系のコミュニティのなかでの移民の家づくりを扱った論考で、家をめぐる戦術に関するオルテガの議論をさらに進め、「移民というよそ者」のなかでの家づくりが「どっちつかずの所属」をくぐりぬけ、「手に入るもので何とかすることによって新たな存在様式に参入し、この過程で自らの環境を変容する」プロセスを伴う事情を明らかにしている (Gallegos 2019: 232)。ここで、ガレゴスは、トマス・イバーラ＝フラウストが「最小のものから最大のものをつくる」(2024) 型破りな美的実践を指すために造った言葉「ラスクアチスモ」に対するメキシコ系アメリカ人 [Chicanx] たちの感性に目を向ける。ガレゴスは述べているように、

ラスクアチスモは、手に入る粗末なもの、壊れたもの、捨てられたものを創意工夫を凝らして利用する人たちが、精巧できらびやかな装飾品を創り出すための美的な表現形式、例えば自転車や車や街頭で商品を売るための屋台 [carrito] をきらびやかにするといった形で現れることがある。(Gallegos 2019: 229)

こうした振る舞いは、些細でおそらくは取るに足りないように見えるかもしれないが、ガレゴスの言葉によれば、「そうしたことをしなければ不安定で馴染みのない空間で何らかの安住感をもたらすような一つの方法」(Gallegos 2019: 233) を与えてくれる。オルテガとガレゴスの議論が合わさることでディアスポラ的な家づくりの多様性と複雑さ、様々な家づくりの実践が緊張や制約や悲嘆だけでなく、創造的な可能性とも絡まり合う様子が描かれている。そこでは世界から締め出され、世界が遮られてしまうが、発想豊かに開かれ、こしらえ直されることもあるのだ。

こうした点に加えて、ディアスポラ的な家づくりに関して、私が——家と故郷 [homeplace] の現象学的意義を認めたいという動機をもちつつも、願わくはその物象化をうまく避けつつ¹⁴——探求したいもう一つの次元が存在する。次の箇所では、人種化され退去させられた

¹⁴ 人種化されたディアスポラ的な人々にとっての家の重要性と共に、家を物象化してしまうことの危険性

人々もまた入植植民地主義の文脈における非先住民として対処しなければならない立場と共犯性をややこしくする形で、家をつくり直すことが働きかねないのはどうしてかを問うことで、家とその拒絶という問いをより複雑なものにしたい。これは、人種化される経験やアイデンティティをめぐる既存の哲学的文献には、ほとんど欠けている点である。私たちが見てきたように、退去されたディアスポラ的な人々にとっての家の喪失は、世代を超えて深刻な形で背負われるものだ。しかし、家をつくり直すことが植民地化による土地の収奪と没収を通して先住民たちが被ってきた、そしてなお被り続けている家の喪失を覆い隠してしまう——よりはぐらかし、一層強固なものにしてしまう——ものだとしたらどうか。もしある人の家づくりやつくり直しが——因果的にせよ概念的にせよ¹⁵——他の人の喪失を条件としているのならどうか。このことは、人種化についての哲学的議論において家と疎外に訴えることにどのような問題を突きつけるのか。

オーストラリアの先住民(クアングムーカのGoenpul族)出身の代表的な研究者アイリーン・モートン＝ロビンソンは「私はまだオーストラリアを故郷と呼ぶ [I Still Call Australia Home]」という論考で、オーストラリア入植植民地における所属と家づくりの様々なあり方を検討し、次のように主張している。

オーストラリアの文脈では、非先住民の主体——植民者／移民——が享受する所属意識や家や場所は、土地のもともとの所有者からの収奪と、国際的な慣習法のもとでの私たち[先住民]の権利の否定に基づいている。(Moreton-Robinson 2003: 23)

言い換えれば、「非先住民の所属意識は、原初の略奪 [original theft] と分かちがたく結びついている」(Moreton-Robinson 2003: 25) ということだ。とはいえ、本稿の目的にとって重要なのは、モートン＝ロビンソンの関心がたんに白人の植民者とその末裔だけでなく、非白人の移民やディアスポラの人々、[そのような] 私たちといわゆるオーストラリアとの関係にも向けられているという点である。彼女は次のように述べている。

非白人移民の所属意識は、「無主地 [Terra Nullius]」というフィクションおよび資本の論理と結びついている。なぜなら、彼らの法的な所属の権利は、[先住民からの] 収奪を可能にした法によって認可されたものだからだ。(Moreton-Robinson 2003: 26)

をめぐる議論については、Ortega 2016, 197 と Ngo 2017, 119/232 を参照。

¹⁵ 私が言いたいのは、入植植民地主義的な国家におけるディアスポラ的な家づくりが入植植民地主義の成功を因果的な条件とすることが(例えば、合法的な庇護や市民権を付与する政府が入植者の国家である場合) 確かである一方で、合法的な参入のこのような付与が当該国家の正統性をさらに確固としたものにし実演するという意味で、この家づくりが入植植民地主義を概念上条件としているということもまた事実なのだ。ロレンゾ・ヴェラチーニは、同様の形で論じている。Veracini, L. "Why Settler Australia Needs Refugees" in *Arena Magazine* 125 (2013) <https://arena.org.au/why-settler-australia-needs-refugees-by-lorenzo-veracini/>

所属の条件が入植者国家の存続可能性〔viability〕によって認可され、それと結びついたものであるということは、モートン=ロビンソンにとって重要である。というのも、彼女の見立てでは、ポストコロニアル状況の研究者たち¹⁶は退去によって生じる異種混交性〔hybridity〕や境界の曖昧さ〔liminality〕を強調するが、その際、かれらの新たな居住地の法的・政治的文脈を十分に考慮に入れていないからだ¹⁷。モートン=ロビンソンは、有色の移民が「所属はできるが所有はできない」(Moreton-Robinson 2003: 26) (さらに「白人性は誰が所有しうるかを定める見えない物差しをなす」と述べながら、有色の移民の政治的地位を白人入植者¹⁸と混同しないように注意を払っているが、有色の移民と白人を同じ側、すなわち「入植者」の側に位置づける動きは重要なものであり、私たちのなかでも人種化を受け疎外される経験をもち、被植民者に対して政治的親近感を感じてきた人々にとって、おそらくは少々不快感を抱かせるものであるだろう¹⁹。しかし、モートン=ロビンソンにとってこの動きは重要なものである、というのも彼女は土地に所属する先住民の根本的な性格——彼女が存在論的で、不可侵〔inalienable〕で、結局のところ入植者の所属とは比較不可能な〔incommensurable〕ものとして記述する関係——を強調しようとするからだ (Moreton-Robinson 2003: 31)。彼女によれば、まさにこのような枠組みから見ると、「先住民は移住の本性〔土地の収奪〕を忘れることはできず、私たちはあらゆる非先住民を、移民かつディアスポラとして位置づけることになる」(Moreton-Robinson 2003: 31, 強調シグ)。

北アメリカの文脈では、ファースト・ネーションの研究者や活動家たちが、これと同様の批判を提起している。編著論集『アジア系入植植民地主義』の序文でキャンディス・フジカネは、アジア系アメリカ人の経験 (アメリカ本土はもちろん、特に彼女が拠点とするハワイにおいて) を再構築すべきだと主張する。この再構築は、人種差別に直面しながら公民権を求めた闘争をもつばら強調する観点から、アジア系アメリカ人がアメリカ入植植民地主義プロジェクトに巻き込まれ、加担してきたことを中心に据えて向き合う視点への転換を意味する。フジカネは次のように述べている。

そうした研究は、人種差別やその他の差別〔discrimination〕、そしてアジア人がア

¹⁶ モートン=ロビンソンは、ホミ・バーバとイアン・チェンバースの二人を例に挙げている (Moreton-Robinson 2003: 29) が、彼女の議論は、他の多くの論者にもあてはまるはずだ。

¹⁷ モートン=ロビンソンは、次のように述べている。「家と場所と所属の社会的な構築は、たんに民族性や想像上の故郷との絆に依存しているだけではない。それらは新たな国とその国の帝國的な遺産のもとの法的・社会的地位や経済的・政治的な関係に条件づけられている」(Moreton-Robinson 2003: 29)。

¹⁸ 彼女はその論考で、白人入植者を「イギリスからの移民」という形で言及する時があるが (Moreton-Robinson 2003: 5, 25)、私見ではこれは——「移民」という言葉が使われる際に通常念頭にあるのは非白人の移民であるのに——白人の移民と非白人の移民の間に意図的な連続性をもたせるものだ。

¹⁹ このような感覚を捉えてジョン・ドッカーは次のように述べている。「アボリジニの人々にとって、移民たちは〔入植者とは〕別の一群の侵略者であり、辺境にいる兄弟姉妹でも、同様に抑圧され土地を収奪された同胞でもない」(Docker, J. "Rethinking postcolonialism and multiculturalism in the Fin de Siècle" in *Cultural Studies*, 9 no. 3 (1995): 409-426, 415)。

メロカ民主主義に全面的に加われない形で排除されてきたことに焦点を当てながら、アジア系の公民権運動を^{ネイション・ビルディング}国家建設の物語として語り、それによってハワイにおいてアジア系の人々が自分自身の地位〔place 居場所〕を主張することを正当化しているのである。(Fujikane 2008: 2, 強調ンゴ)

しかし、この正当化は結局のところ、アメリカ入植植民地主義プロジェクトの正統性を強化することがあっても、揺るがすことはない。そこでは「「移民」成功譚の賛美——ディアスポラ的家づくりを測る表面的な尺度の一つ——が、「アメリカ入植植民地主義〔US settler colonialism〕によって可能となった、アジア系入植者の政治権力を正当化しようとする試み」(2008: 5)になっているのである。このように、この編著論集は、ネイティブ・ハワイアン^{ネイティブ・ハワイアン}の研究者で活動家のハウナニ＝ケイ・トラスクが1994年に集会で朗読した詩「入植者であって、移民ではない〔Settlers, not immigrants〕」(2008: vii)を巻頭に掲げ、そこから全体の構想を導き出している。この詩はハワイにおけるアジア系移民の経験の捉え方を再構築するように呼びかけるとともに、かれらが植民地主義プロジェクトに加担していることを厳しく指摘している。その後の論考「有色の入植者と「移民」覇権主義」(2000年)でトラスクは、アジア系住民が「移民」という呼称を避けて「地元」住民と名乗ることでネイティブ・ハワイアンの存在を消去している点を批判し、次のように述べている。

私たちネイティブ・ハワイアンにとって、アジア系住民の成功は外来の覇権が新たな形をとったものにすぎない。私たちの植民地化の歴史は繰り返されてきた物語である。一度目はヨーロッパやアメリカの商人・宣教師による発見と入植であり、二度目はプランテーション労働者として来た日本人、中国人、やがてフィリピン人が島々で支配的地位へと登りつめる、という物語である。(Trask 2000: 2-3)

トラスクの主張を根拠づける歴史的・地政学的な固有の文脈があり、彼女が論考を執筆した時点で、ハワイのアジア系住民は社会的・政治的権力を行使することができた。しかし、こうした状況は、モートン＝ロビンソンが論考を執筆した当時のオーストラリアにも、現在のオーストラリアにも当てはまらない²⁰。こうした違いがあるにしても、トラスクとモートン＝ロビンソンはともに、移民と先住民の関係、とりわけディアスポラ^{ホーム・メイキング}の家づくりをめぐる難問かつ重要な問いを提起している。

ここで示されている批判と問題提起は二重である。一方で、有色の移民を入植者として描き直そうと呼びかけることは、入植植民地主義の文脈で退去させられ、再定住した〔replaced〕人々が、たとえ無自覚であろうと望んだものでなかろうと、入植植民地主義の受益

²⁰ ここで指摘しておきたいのは、権力の問題は重要であるが、それによって移民入植者が占める構造的位位置や、かれらと先住民との関係および義務を変化させるわけではない、というフジカネの議論(2008: 9)である。特にフジカネが参照するのは、オーストラリアの研究者たちの議論である。「イェン・エン、アン・カーソイズ、ジョン・ドッカーは、オーストラリアにおけるアジア系住民は政治的権力を持たないものの、先住民との関係においては依然として入植者である、と主張している」(Fujikane 2008: 11)。

者となっていることに光を当てる²¹。しかし第二に、移民を入植者として描き直すことは——特に入植植民地主義を出来事ではなく構造とみなすパトリック・ウルフ (Wolfe 2006) にならった場合——、退去させられディアスポラとして生きている人々が、進行中の植民地主義的プロセスのなかで積極的な加担者となりうる、というあり方に注意を促す。こうした観点から、ムナンジャリ系 [Munanjahli] で南洋諸島出身の研究者チェルシー・ワテゴは、著書『植民地の日常』のなかで「有色の植民者 [colonisers of colour]」(Watego 2021: 107, 136) という語を用いている。この枠組みを転換すると何が問題になるのかを詳述しつつ、フジカネは次のように述べている。「入植国家において移民の存在を認識しなかったことで、入植国家が「多文化国家」へと変貌するという歴史的幻想を可能にしている」(Fujikane 2008: 11)。今日のリベラルな多文化主義的「るつぼ [melting-pot]」社会を描くこうしたヴィジョンは、先住民を多文化主義という広範な傘の下に収まる集団のひとつでしかないという位置づけ、その結果、モートン＝ロビンソンが主張するように (Moreton-Robinson 2003: 31)、先住民と土地を結ぶ固有の存在論的つながりを根本的に誤って描き、抹消してしまう。入植植民地主義の顕著な特徴の一つが、ウルフ (Wolfe 2006) の言う「先住民の排除 [elimination of the native]」やリラ・シャリフ (Sharif 2016) の言う「消滅 [vanishment]」であるならば²²、[先住民と] 連帯するには、入植植民地主義国家へと退去させられ、そこで再定住を余儀なくされた人々の家づくりという実践は、植民地化された人々を置き換える [replace] というプロジェクトに対して積極的に抵抗するものでなければならない——というのも、結局のところその置き換えこそが、入植植民地主義プロジェクトの最終目標だからである。実際、政治理論家ハガー・コテフによれば、イスラエルによるパレスチナ占領は、オーストラリアやアメリカの植民地主義の文脈と、とりわけ「時間的密度」(Kotef 2020, xi-xii) の点で異なるが、この占領を見るだけで「置き換え」というジェノサイド的な試みが行われていることがわかる。

オーストラリアの政治風景では、入植者としての居心地の悪い立場に向き合う取り組み

²¹ オーストラリアの白人歴史家アン・カーソイズは、しばしば引用される 2000 年の論考で次のように述べている。「最近の移住者であれ、移民の子孫であれ、すべての非先住民は、植民地主義の歴史の受益者である。私たちは他の者の土地の上で暮らしているという状況を共有している」。Curthoys, Ann. “An Uneasy Conversation: The Multicultural and the Indigenous” in Docker J. and Fischer G. (eds.) *Race, Colour and Identity in Australia and New Zealand*. University of New South Wales Press, 2000: 21–36, 32.

²² エヴィン・レ・エスピリトゥ・ガンディーは次のように述べている。

一回限りの「出来事」ではなく、反復的な「構造」として、入植植民地主義は先住民が土地と結ぶ関係を絶えず塗り替えようとする。言い換えれば入植者は、植民地主義的な先住性の神話を確立するために、先住民の宇宙観 [cosmologies] を形成してきた土地や水域から先住民の「排除」——パレスチナ系アメリカ人の研究者リラ・シャリフのいう「消滅」——を企てている。(Gandhi 2022: 2)

が人種化された非先住民のあいだで着実に広がりつつあり、例えば活動家²³や学者²⁴が「有色の入植者」という用語を積極的に採用している。重要なのは、この用語が通常、幅広く用いられ、自らを人種化された存在として認識しながらも、必ずしもディアスポラの一員だとは考えていない非先住民——例えば、オーストラリアに何世代にもわたって根づいている人々——までも含めて指す、という点である。しかし、「有色の入植者」という用語は、入植植民地化のプロセスにおいて人種化されたディアスポラ共同体の加担に光を当てる非常に重要な働きをする一方で、この用語が様々な集団——例えば、本節のはじめに論じた難民——の、まったく異なる経験や立場を覆い隠してしまう危険もある。エヴィン・レ・エスピリトゥ・ガンディー (2022) は、グアムおよびイスラエル=パレスチナにまたがるベトナム人の再定住と脱植民地化について探究した著作のなかで、この複雑な立場を指す用語として「難民入植者 [refugee settlers] ²⁵」を新たに考案した。彼女は次のように記している。

難民入植者は、自分たちが組み込まれ、呼びかけられている [interpellated] 国家の入植植民地主義政策に対して、直接の責任を負うわけではない。しかし、かれらの家づくりプロセス——再定住先の新しい国で所属できる島 [island 居場所] を作るプロセス——は、係争中の土地で行われる。結果として、かれらはマイケル・ロスバークのいう「巻き込まれた主体 [implicated subjects]」となるのである。(Grandhi 2022: 5)

こうした概念カテゴリーを提案することによって、ガンディーは、ロレンゾ・ヴェラチーニが記述した移住者の「非主権的な退去」(Veracin 2015) から、パレスチナの法学者ラエフ・ズレイクが論じる移民と入植者との区別に至るまで、すでにほかの研究者たちが明確化しようとしていた差異に取り組んでいる。この区別について、ズレイクは次のように述べている。

マフムード・マムダニが述べているように、このことによって私たちは入植植民地主義者と移民を同一視してはならない。移民とは異なり、入植植民地主義者は現地

²³ Collective on Anti-Racism による反人種差別的な記事一覧には、「有色の入植者」というカテゴリーのもとで広範な読書リストが含まれる (<https://www.collective-on-anti-racism.com/anti-racist-syllabus-topics/3.-settlers-of-colour>)。また、Australian Muslim Times (<https://www.amust.com.au/2023/10/we-are-settlers-of-colour-but-are-we-ready-to-listen-to-their-voice/>)と Overland Magazine (<https://overland.org.au/2021/04/its-not-enough-to-say-stopasianhate/>)で公表されている論考群もある。

²⁴ 以下の例がある。 <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.1111/anti.13035> ; <https://overland.org.au/2020/07/statement-artists-and-academics-against-annexation/> ; <https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/13688790.2020.1719579>

²⁵ しかしガンディーは、この用語がかつて、より問題含みの文脈で用いられていたことを指摘する。「いわゆる「フロンティア」に果敢に踏み込んだ白人労働者階級の入植者」や、第二次世界大戦末期にパレスチナを「ユダヤ人難民入植者のための祖国」としたさまざまな描写が含まれる (Grandhi 2022: 4)。

の法律の管轄下に置かれることを拒否する。彼自身が法律である。彼は自分自身の法律、〔自己完結した〕全体性、参照枠を持ち込んでくる。法律の制定に際して、^{パトナー}共同者の存在を一切認めないのだ。(Zreik 2016: 357)

ここで注目すべきは、ズレイクの立場が移民一般を対象にしていること（エスピルトゥ・ガンディーのように、難民だけに限定していない）、そして第二に、この区別を設ける点で、ズレイクの立場はトラスクやモートン＝ロビンソンの立場と異なっているということである。私の見るところ、以上のことの核心には、私たちの社会的位置づけをめぐる異なった、時には相いれない領域で生じる生々しい緊張がある。それは一方で、植民地権力によって（渋々ながらも）存在を承認されている「入植者」という構造的立場と、他方で退去させられ、気づけば敵意ある社会に身を置いている人々が抱く、生きられた情動的な断絶感〔sense of estrangement〕とのあいだの緊張である——そうしたところでは、自らを家にいる〔being-at-home〕、あるいは「定住している〔settled〕」と十全な意味で言い表すのには無理がある。しかしもしそれが緊張であるならば、それは解消や消滅を求めるのではなく、保持したまま留まって向き合うべき緊張である。

同時に、ディアスポラの人々や難民たち自身が、エスピルトゥ・ガンディーが「悩ましい立場性〔vexed positionalities〕」(Gandhi 2022: 2)と呼ぶものを敏感に意識し、その課題を引き受けて対処しようと模索していることを示す十分な証拠がある。コミュニティ活動や芸術プロジェクトは、往々にしてこうした模索の現場そのものであり、そこではディアスポラと先住民の両集団に双方向的に働く連帯の表現が見られる²⁶。グエンのような著述家たちが探究してきたように、私たちは時として、自らの家とアイデンティティをめぐる模索のなかで生じる二重性、対立、矛盾と向き合わなければならない。

しかしアメリカ型の二項対立
植民者か被植民者かのなかでは
難民であるあなたは、
被植民者なのか、それとも
植民者なのか。
おそらくその両方なのだろう。
二項対立がふさわしくない時も
あるのだ

But in AMERICA™'s binary
of colonizer and colonized,
are you, a refugee, the
colonies or the
colonizer?

Perhaps you are both. Sometimes binaries are inadequate.
(Nguyen 2023: 85)

²⁶ このことの例としては次のものがある。McKinnon, Crystal. “Enduring Indigeneity and Solidarity in Response to Australia’s Carceral Colonialism.” *Biography* 43, no. 4 (2020): 691–704 で描かれている RISE Refugee’s Sovereignty and Sanctuary project; Working From Home (may ở nhà): Stories of Vietnamese outworkers in the Australian fashion industry (<https://mayonha.com/read>); Collective Unease の一部で展示されている芸術家の James Nguyen’s “An Australian National Song” (https://www.youtube.com/watch?v=5tU5iX4j_-8); 2023 年オーストラリアの現代美術センターにおける芸術家の Mithu Sen の展示「mOTHERTONGUE」(<https://acca.melbourne/exhibition/mithu-sen-mothertongue/>)。

同様に、パレスチナ系オーストラリア人の活動家タスニム・マフムード・サマックは、論考「そこでは先住民、ここでは入植者 [Indigenous There, Settlers Here]」において、ナクバの70周年を振り返りながら次のようにつづっている。

二人の若い息子をもつ母親として、いま私にできるのは、亡命を余儀なくされたパレスチナ人の四世代目として彼らを育てるだけだと痛感している。しかし私は、この亡命先の家で、彼らにオリーブの木と同じだけユーカリの木を植えさせるつもりだ。私は、「川から海へ」[パレスチナ解放のスローガン] よりもずっと大きな声で、「いつもあったのは」[Always was, always will be Aboriginal land いつもあったのは、これからもあるのはアボリジニの土地、というアボリジニの土地返還運動のスローガン] と彼らに声を上げさせるだろう。

私たちの活動を、この国における ATSI [Aboriginal and Torres Strait Islander アボリジナルおよびトレス海峡諸島民] の抵抗運動を後方から支える立場に置くことの必要性は、矛盾を含んだ言い方だが——(パレスチナ系) 先住民入植者として私たちが負う責任と同じぐらい切迫している。(Mahmoud Sammak 2018)

実際、こうした矛盾や自己撞着に向き合わなければ、壊滅的な結果を招く可能性がある。ウクライナ戦争から逃れたユダヤ人難民をイスラエルが受け入れた直後に執筆された2022年のオピニオン記事で、ズレイクは、シオニズムを掲げるイスラエルにおいて難民が入植者へとすり替わる事態を次のように捉えている。

この緊張は遥かに大きな物語の完全な縮図を示している。つまり、20世紀初頭以来、広く展開されたシオニズムという壮大な物語であり、それは命を救い、抑圧に抵抗するという崇高な目的が、結果として他の人々への抑圧を正当化することに利用されてしまうのである。

それは、収奪され無力だった人々が、やがて収奪を行う側の強力な行為者となってしまふという物語である。またそれは、ヨーロッパ人が命からがら逃げていくユダヤ人難民の背中を見ている一方で、私たちパレスチナ人は自分たちの土地と家を奪い取る兵士や入植者の顔を見ているという物語である。(Zreik 2022)

入植植民地主義の文脈のなかで難民として生きる複雑さに何とか対処しようと模索してきたことで、エスピリトゥ・ガンディーはベトナム語のヌオック [nước] という概念にたどり着いた。この言葉は、水を意味すると同時に、^{カントリー} 国^{ホームランド} や祖 国をも意味する²⁷。この概念によってガンディーは、私たちのアイデンティティがもつ多層性や変化していく意味を、その絡み合いを受け入れながら保持する方法を見出す。

他方、水には流動性、逃走性、移動性、連結性が含意される——海の絶え間ない波

²⁷ nước に đất (土地、土) を組み合わせると đất nước という語ができ、国や祖国を意味する別の表現になる。

が国境を侵食するように、ブラック・アトランティックから環太平洋^{トランス・パシフィック}、シリアからベトナムのボート難民に至るまで、水はディアスポラや退去をめぐる際立った媒体であり、メタファーでもある。しかし、水は陸と対立しない。ヌオックをめぐるベトナムの認識様式を通じて解釈された群島というイメージは、陸と水、先住民と難民の絡み合いを思い起こさせる。実際には、先住民が入植植民地主義的な退去によって難民となりうるし、難民は先住民の土地や水域で入植者となりうるのである。(Gandhi 2022: 11)

結論

本稿は、白人入植者社会において人種化されたディアスポラの主体として経験し、模索するなかで、家とその拒絶がどのように現われるのかを深く考察しようとする試みである。肉体の次元にも場所の次元にもそれぞれ深く根ざした疎外経験によって形づくられながらも、私はこれらの糸を束ねて、「家」が人種化の暴力や退去による傷に名前を与える創発的な枠組みとなりうる道筋を深く検討し、同時にいくつかの限界と緊張を探った。本稿の第一部では、身体と肉体の次元における疎外経験を取り上げ、人種化された押収に関する議論と、チェーンによる人種化された身体にある構成的なモノ性と断絶という議論を関連づけながら考察した。私の見立てでは後者は、身体には本来的に馴染みがあり、「私の身体」であるという観念を揺さぶることになる——たとえ私たちが人種差別の剥奪的な暴力に直面して、その観念に固執したくなくとも。本稿の第二部では、場所という次元における疎外という問題、特に入植植民地主義の文脈での人種化された退去の複雑性を取り上げた²⁸。ここで私が取り組んだのは、人種化され退去させられた主体であるだけでなく、それと同時に、入植者である主体として入植植民地化のプロセスに巻き込まれているとはどういうことか、という問いである。この見方では、批判的人種研究の課題は、これまでと同様に脱植民地主義研究と並走するだけでなく、その研究と関係を結びながらも緊張を含んだなかで自己反省をすることである。そうすることで、私たちの概念的資源はどのように変わるのか。本稿の二つの箇所を合わせて考えると、私は、「家」という概念が人種化されたディアスポラ主体の複雑で矛盾した経験を捉える概念的な力そのものを揺さぶることになる、と提起している。あるいは、別の角度から考察すれば、これら二つの議論は家の重要性を肯定しつつ、他方でその不可能性をも照らし出しているのかもしれない。すなわち、一度も存在したことがない家（肉体）と、決して存在しえない家（場所）というように。「家」という概念が身体的で場所的、情動的で政治的といった人種化された疎外の多様な領域を深く検討するうえでな

²⁸ 本稿で扱ってきたのは、主にオーストラリアの（付随的にアメリカの）入植植民地主義の文脈である。

したがって、そうした文脈で共有されている人種と先住性の理解に基づいて考察してきた。ラテンアメリカといった別の入植植民地主義の文脈で、人種、ディアスポラ、先住性というカテゴリーを深く検討するには、それぞれ異なる歴史的形成過程から生まれた独自の概念枠組みと手法が必要となる。もっとも、これらのカテゴリーを相互に合わせて、その複雑性を含めて考察するという課題は私たちに共通している。拡張された文脈で拙稿を考え直す機会を与えてくださった、ペンシルベニア州立大学でのシンポジウム参加者の皆さんに感謝申し上げます。

お有効であり続けるとすれば、私たちはまずその両義性を強く主張しなければならないだろう。ここで私が提示できていればと願うのは、私たちがどこに、どのような立場に置かれていても、家と家づくり、疎外と拒絶のあいだの緊張をどのように引き受けていくのかを考え始めるための一つの糸口である。

文献

Journal

- Al-Saji, Alia. "Too Late: Racialized Time and the Closure of the Past." *Insights* 6 no. 5 (2013): 1-13.
- Al-Saji, Alia. Touching the wounds of colonial duration: Fanon's anticolonial critical phenomenology". *The Southern Journal of Philosophy*, 62 (2024): 2-23
- Cheng, Anne A. "Ornamentalism: A Feminist Theory for the Yellow Woman". *Critical Inquiry* 44 (2018): 415-446.
- Docker, J. "Rethinking postcolonialism and multiculturalism in the *Fin de Siècle*" in *Cultural Studies*, 9 no. 3 (1995): 409-426.
- Gallegos, Lori. "Conflicts of Home-Making: Strategies of Survival and the Politics of Assimilation." *Journal of Intercultural Studies* 40, no. 2 (2019): 225-38.
- Kurien, P. and Purkayastha, B. "Why Don't South Asians in the U.S. Count As 'Asian'?": Global and Local Factors Shaping Anti-South Asian Racism in the United States". *Sociological Inquiry*, 94 (2024): 351-368.
- Leboeuf, Céline. "Bodily Alienation and Critical Phenomenologies of Race". *Puncta: Journal of Critical Phenomenology* 5, no. 4 (2022): 125-127.
- Marotta, Vince. "Meeting Again: Reflections on *Strange Encounters* 20 Years On." In *Journal of Intercultural Studies* 42, no. 1 (2021): 1-7.
- Mendoza, José J. "'GO BACK TO WHERE YOU CAME FROM!' Racism, Xenophobia, and White Nationalism" in *America Philosophical Quarterly*, 60 no. 4 (2023): 397-410.
- Murphy, Ann. "The Spirited Interworld: Caregiving and the Liminal Phenomenology of Dementia" in *Puncta: Journal of Critical Phenomenology* 7, no. 1 (2024): 57-67.
- Ortega, Mariana. "Bodies of Color, Bodies of Sorrow: On Resistant Sorrow, Aesthetic Unsettling, and Becoming-With." *Critical Philosophy of Race* 7, no. 1 (2019): 124-43.
- Sharif, Lila. "Vanishing Palestine." *Critical Ethnic Studies* 2, no. 1 (2016): 17-39.
- Trask, Haunani-Kay. "Settlers of Color and 'Immigrant' Hegemony: 'Locals' in *Hawai'i*". *Amerasia Journal* 26, no. 2 (2000): 1-24.
- Wolfe, Patrick. "Settler colonialism and the elimination of the Native" In *Journal of Genocide Research*, 8 no. 4, (2006): 387-409.
- Zeiler, Kristin. "A Phenomenology of Excorporation, Bodily Alienation, and Resistance: Rethinking Sexed and Racialized Embodiment". *Hypatia* 28, no. 1 (2013): 69-84.
- Zreik, Raef. "When Does a Settler Become a Native? (With Apologies to Mamdani)". In *Constellations*, 23 no. 3 (2016): 351-364.

Book

- Ahmed, Sara. *Strange Encounters: Embodied Others in Post-Coloniality*. Routledge, 2000.
- Angelou, Maya. *All God's Children Need Traveling Shoes*. Vintage Books, 1991.
- Butler, Judith. *Giving An Account of Oneself*. Fordham University Press, 2005. バトラー、ジュデイス『自分自身を説明すること——倫理的暴力の批判』、佐藤嘉幸・清水知子訳、月曜社、2024年。
- Butler, Judith. *Precarious Life: The Power of Mourning and Violence*, Verso, 2006. バトラー・ジュデイス『生のあやうさ——哀悼と暴力の政治学』本橋哲也訳、以文社、2007年。
- Cheng, Anne A. *Ornamentation*. Oxford University Press, 2019.
- Cheng, Anne A. *Ordinary Disasters: How I Stopped Being a Model Minority*. Pantheon Books, 2024.
- Curthoys, Ann. “An Uneasy Conversation: The Multicultural and the Indigenous” in Docker J. and Fischer G. (eds.) *Race, Colour and Identity in Australia and New Zealand*. University of New South Wales Press, 2000. 21–36.
- Fanon, Frantz. *Black Skin, White Masks*. Translated by Charles L. Markmann. Grove Press, 1967.
- Fujikane, Candace and Okamura, Jonathan Y. *Asian Settler Colonialism: From Local Governance to the Habits of Everyday Life in Hawai'i*. University of Hawai'i Press, 2008.
- Gandhi, Eryn L. E. *Archipelago of Resettlement: Vietnamese Refugee Settlers and Decolonization across Guam and Israel-Palestine*. University of California Press, 2022.
- Guenther, Lisa. *Solitary Confinement: Social Death and its Afterlives*. University of Minnesota Press, 2013.
- Kotef, Hagar. *The Colonizing Self: Or, Home and Homelessness in Israel/Palestine*. Duke University Press, 2020.
- Le, Nam. *36 Ways of Writing a Vietnamese Poem*. Scribner, 2024.
- Moreton-Robinson, A. “I Still Call Australia Home: Indigenous Belonging and Place in a White Postcolonizing Society.” In S. Ahmed et al., *Uprootings/Regroundings : Questions of Home and Migration*, 23-40. Bloomsbury, 2003.
- Ngo, Helen. *The Habits of Racism: A Phenomenology of Racism and Racialized Embodiment*. Lexington Books, 2017. ンゴ、ヘレン『人種差別の習慣——人種化された身体の実現象学』小手川正二郎・酒井麻依子・野々村伊純訳、青土社、2023年。
- Nguyen, Viet T. *The Sympathizer*. Corsair, 2015.
- Nguyen, Viet T. *The Displaced: Refugee Writers on Refugee Lives*. Abrams Press, 2018.
- Nguyen, Viet T. *A Man of Two Faces: A Memoir, a History, a Memorial*. Corsair, 2023.
- Ortega, Mariana. “Hometactics: Self-Mapping, Belonging, and the Home Question.” In E. S. Lee, *Living Alterities: Phenomenology, Embodiment, and Race*, 173-188. SUNY Press, 2014.
- Veracini, Lorenzo. *The Settler Colonial Present*. Palgrave Macmillan, 2015.
- Watego, Chelsea. *Another Day in the Colony*. University of Queensland Press, 2021.
- Yancy, George. *Black Bodies, White Gazes: The Continuing Significance of Race*. Rowman & Littlefield, 2008.
- Yancy, George. “Confiscated Bodies.” In G. Weiss, A. Murphy, & G. Salamon (eds.). *50 Concepts for a Critical Phenomenology*, 69. Northwestern University Press, 2019.

Young, Iris M. “House and Home: Feminist Variations on a Theme” In Young, Iris M. *On Female Body Experience: ‘Throwing Like a Girl’ and Other Essays*. Oxford University Press, 2005. 27-45.

Online sources

Cheng, Anne A. “Do You See It? Well, It Doesn’t See You! (interview with Tom Hollert). *e-flux Journal* 65 (2015). <https://www.e-flux.com/journal/65/336500/do-you-see-it-well-it-doesn-t-see-you/> (last accessed 07 April 2025)

Cheng, Anne A. “Monsters, Cyborgs, and Vases: Apparitions of the Yellow Woman” (lecture). Harvard Graduate School of Design, 2021. <https://www.gsd.harvard.edu/event/anne-anlin-cheng-monsters-cyborgs-and-vases-apparitions-of-the-yellow-woman/> (last accessed 07 April 2025)

Human Rights Law Centre, “‘Piss off back to Pakistan’: Senator Hanson’s remarks amount to racial discrimination, the Federal Court finds.” <https://www.hrlc.org.au/human-rights-case-summaries/2024/11/25/faruqi-v-hanson>

Mahmoud Sammak, Tasnim. “Indigenous there, settlers here: Palestinians in Australia” *Overland Literary Journal* (2018). <https://overland.org.au/previous-issues/nakba70/essay-tasnim-sammak/> (last accessed 07 April 2025)

Veracini, L. “Why Settler Australia Needs Refugees” in *Arena Magazine* 125 (2013) <https://arena.org.au/why-settler-australia-needs-refugees-by-lorenzo-veracini/>

Ybarra-Frausto, T. “Amalia Mesa-Bains and Tomás Ybarra-Frausto in Conversation” In *The Latinx Project* (2024). <https://www.latinxproject.nyu.edu/intervenxions/amalia-mesa-bains-tomas-ybarra-frausto>

Zreik, Raef. “Where refugees become settlers” In *+972 Magazine* (2022). <https://www.972mag.com/refugees-settlers-israel-ukraine-palestine/>

(ヘレン シンゴ・ディーキン大学)
(さかい まいこ・高知大学)
(こてがわ しょうじろう・國學院大學)
(ののむら いずみ・上智大学)